

「多様な人が集い、つながる場」としての都生研

1 はじめに

僕と都生研との出会いは学生時代でした。松田良一先生の研究室に、ある日板山先生や鍋田先生がいらっしやり、学生だった僕に都生研を紹介して下さいました。それから数年後、都立の教員採用試験に落ち、翌年もう一度試験を受けながらも、茨城の某私立高校に内定をいただけたのでそちらに就職しようとしたところ、都生研の先輩方から信じられないような勢いで反対され、気持ちを翻し、無事に(?)都立高校に採用された、ということもありました。都生研との不思議な縁がなければ、僕は今こうして都立の(そして東京都の)教員はしていなかったと思います。そう考えると教員としてのキャリアの始まりから今までずっと、都生研は僕の中で特別な位置を占め続けています。その大切な都生研の50周年記念誌に寄稿できることはこの上ない喜びです。

2 文書発送作業を担当して

2010年度、井草高校から新宿山吹高校へ異動したタイミングで、都生研の文書発送を鍋田先生より引き継ぎました。そこから2014年度途中まで文書発送を担当させていただきました(2014年度後半からは新宿山吹高校の伊藤先生に担当していただいています)。都生研の文書発送は、会員の皆様に研修会等の情報を共有するためのシステムです。年間を通じてかなりの数の研修会が実施されていますが、文書を見て研修会の情報を得て参加される方も多数いて(僕自身もそうですが)重要な情報源として活用されています。

このような大きな意義がありながらも、担当を引き継いだ当時は発送作業に集まる人員が少ないという問題が恒常化していました。この問題に対して、単なる「文書発送作業」だけではなく「情報交換会」を同時開催というようにして付加価値をつけてみたらどうだろうかと考え、その試みを継続してみると、若手を中心にある程度の人数が確保できるようになりました。ある時、文書発送に初めて参加したある先生から「これをいつもボランティアでやってるってすごいことですね」と言われました。僕もすごいことだと思います。

もし文書発送作業の目的が「継続すること」そのものになってしまっていて、そんなつらい仕事を誰かが引き受けなければならないと考えられているとしたら、やめてしまった方がよいかもしれません。しかし、実際に担当をしてみて、この仕事にはそれ以上の様々な価値があるとわかりました。

3 都生研の価値とは

文書発送の価値を考えていると、自然と都生研そのものの価値についても考えていました。都生研には、様々な価値があり、人によってそれは形を変えているのだと思いますが、僕自身が感じる価値を挙げてみます。

まずは、研修機関としての価値です。ここでは、「わからないから教えて下さい」「助けて下さ

い」を言うと、必ず助けてくれる方々がいます。人生の様々なステージで、時に組織から縁遠くなることもあるかもしれないけれど、いつでも誰かが何かをやっていて、そこに「在り続ける」ことで、いつでも誰かの力になれる。都生研は「誰にでも開かれ、いつでも実践的な学びが得られる場」であり、そこには先代の先生方のミームの継承という機能があると思います。

次に、知的生産機能を担う価値です。都生研には多様な人が集まります。そこでは、ミームの継承だけでなく、時に「新たなミームの創造」もあります。そして新たなミームがまた継承されていきます。これには、多様な人が集まり自由闊達に議論が行えることが重要です。都生研は、年齢、経験、地位、全て関係なくニュートラルな立場で情報交換を行える場です（「無礼講」という意味ではありません）。このような体制で学べ、かつこれだけのネットワークを持っている研究組織は、全国的に見ても稀有だと思います。

4 文書発送作業の価値とは

上に述べた都生研の価値は、非常にシンプルな、しかし強力な一つの事実に支えられています。それは、都生研は「人と人がつながる場」だということです。このことが、実は都生研の最大の強みであり価値であろうと感じます。文書発送作業を通じて一番感じたことは、実はこのことなのです。

平日に集まり、ボランティアで膨大な作業を年間5回も行う。これは大変なことです。単に献身的な姿勢で「つらいことも我慢して」という気持ちでは継続することは困難でしょうし、ストレスを抱えることにもなりかねません。しかし、今文書発送に参加されている方々で、「大きな負担感がありながら、つらいことも我慢して、仕方がないから作業する」という気持ちの方はほとんどいないと思っています。作業中あるいは作業後の対話がありあるものになっていると感じられるからです。もちろん、皆さんそれぞれに仕事があり、文書発送に参加する時間を捻出することは難しいことでしょう。しかし、それでも作業に参加しようと思えるのは、都生研への奉仕という意味合いだけではないように思います。僕自身の感覚としては、いつの間にか文書発送作業自体も「人と人がつながる場」としての機能を持ち始めたということなのです。その価値を提供し続けることを意識すると、仕事の持つ意味をより実感することができました。

5 最後に

都生研 50 周年という大きな節目に、自分が何を大切にしたいのか、何でどう貢献すべきなのかを考えています。それは、単純な犠牲や奉仕の精神ではありません。「つらい＝えらい」は人を不幸にします。「気持ちよく、皆でやれば、つらくない」、都生研はずっとそんな組織であったと思いますし、これからもそうあってほしいと思います。

都生研は「多様な人が集い、つながる場」です。文書発送担当からHP担当、そしていずれはまた違う仕事をするようになるかもしれませんが、「人がつながる場の提供」は僕自身の都生研の活動の大きな目的としてずっと大切にしていきたいです。それが自分なりの「恩送り」の形だろうと思っています。ベテラン教員から若手教員、そしてまだ見ぬ未来の教員の方々とともに手を携えて都生研の「これから」を紡いでいければ、それはとても幸せなことです。